

幼児ののぞましい言語指導は

どのようにすればよいか”より

遊びに入るとききの指導―事例研究―

大津市立大津幼稚園

ままごと遊びなどのグループへ仲間入り

しようとする場合の指導事例

I 五月十九日(土) 四歳児

・活動の場 保育室でままごと道具を使って遊んでいる。

・実際の活動(ゴチャックが教師の活動)

男子三名がままごとを始める。いつもお客さんは教師である。

K子は注文したつもりでまっているが、相手には通じていない。

K子「あんたらちよっと、先生はっかりにごちそうして、やき

めしたのんでるのに」

W男「そんなやすもん、おいてへんわ」

K子「そやかて、たのんだやんか」

教師「そしたら、なにがあるの」

W男「なににしよう、あんた電話してくれ」

K子「あのね、ごはんちょうだい」

W男「聞こえへんや、もつと大きな声でゆうてえな、なにのご

はんや」

K子「カレーのごはん」

T男「そしたら、ぼく、はこんだけよか」と、ぼんやりすわ

り、ままごと道具で遊んでいる友だちを見ていたT男がい

った。

W男「おまえしてへんのにいらんわ」

T男、しょんぼりしていすにすわる。

K子「そんならうちがあげるわ、あんたらもあげよ」とぼんや

りすわっているT男のところにごちそうをもっていってあ

げる。

T男、またなべをもち、他のところにすわっている友だとのと
ころにあげに行く。

W男「そんなんしたらあかんや」

T男、あきらめてかえる。

K子「カレーうどん、はやくしてください」

教師だまってダンボール箱のふたをだす。

T男、教師の出した箱のふたをもち、

「カレーうどんやです」とその箱のふたの中にごちそうを
入れて、はこんで回る。

K子「もしもし、もうたべましたからはやくとりにきてくださ

い」

・考察

T男は、遊びに仲間入りしたいというより、ままごと道具にさ
わりたい、また使いたいという気持ちで「そしたらぼく、はこん
だげよか」という言葉で言いあらわしているが、W男には受け入
れられなかった。しかし、しょんぼりしているT男のようすをK
子が見て、かわいそうだと思ったのであろうか、T男のところへ
ごちそうをもっていき、T男が遊びに入るきっかけを作る機会を
与えている。またT男がなべをもち他の幼児のところにもってい
くときもW男は拒否しているが、T男の表情をさっして今度は教

師がダンボール箱のふたを出してやったことにより、運ぶ人にな
って仲間入りができた。W男もT男の言動から遊びに入りたがっ
ていた強い気持ちが少しずつわかり、受け入れたのではなからう
かと思われる。したがってT男のようにその時の「運びたい気持
ち」をそのまま表現できることが、仲間入りできるひとつの大切
な必要条件だといえる。

II 六月二十六日(火) 四歳児

・活動の場 保育室でままごと道具を使って遊んでいる。(W男
の場合)

・実際の活動

N男、S男、K男の三人がままごとで場で遊んでいる。E男と
A男はキングブロックでのりものを作って遊んでいる。W男はろ
うかで遊んでいたが、ままごと道具を使って遊びたくなり仲間入
りしようとしている。

W男「まぜて」とお客さんできていたA男とF男の方を見てい
う。

A男「S男にいえや」

W男「まぜて」とS男にむかっていう。

S男、だまっている。

A男、S男がだまっていたのできゅうりとほうちょうを手に持ち、

「こうして切るんやで」と切るまねをして見せる。

W男「こうか」と切って見せる。

A男「ちがうやんか」と今度は自分で切って見せる。そしてオムライスにきゅうりがついているのを注文する。

W男、そのまま遊びの仲間に入る。

考察

W男は「まげて」とはっきり仲間入りのことばを言っているが、受け入れるS男は、ことばで返答できなかったため、役割意識もすっかりもっていて、はっきり話せるA男の配慮によりW男は仲間入りしている。S男、N男、K男とA男、W男のかかわりは、弱いようである。

III IIに同じ

・活動の場 II (H男の場合)

H男がろうかで遊んでいて、ままごと道具を使って遊びたくなり、仲間入りをしようとしている。

H男「まげて」

W男「ほうちょうがないし、あかんわ」

H男「まげてーな」

W男「ちよつとまってや、まぜたげるけど、ほうちょうがない

し、お客さんやったらまぜたげるか」

教師「どうした、まぜたげた？」

W男「ちよつとでも客さんになったら、家の人にならしたげるわ」

H男はW男に言われたが、お客さんになるのはいやなようすがある。しかしままごとの場では遊びたいらしく、その近くのキングブロックを使って遊んでいる幼児のところと一緒に遊びながら、ままごと遊びの場の方を見ている。

A男が教師のところにコーヒーをもってきたので、

教師「A男君ありがとう、おいしかったわ。その汽車にのってはる人も飲みたいって言ってはるし、もっといってあげて」とキングブロックでのりものを作って遊んでいるE男や、あとから入ったH男のことをさして言う。

A男、おぼんにコーヒーをのせてH男のところにもっていってあげる。

H男「どかーん、どかーん」

と大きな声で言いながらコーヒーカーップを返している。

教師「H男君、先生のももっていって」

H男、教師のコーヒーカップをとりききて、

「どカーん、どカーん」

といいながら返しにいき、

「プリン一個下さい」といってお客さんになる。

そのあとしばらくして家の人にならしてもらい、赤ちゃんの役をしている。

・考察

W男はまぜたくない気持ちを、「ほうちようがないし……」ということでことわっているが、教師の「どうした、まぜたげた」という問いかけに対して、少し主張をやらわらげ「ちょっとでもお客さんになったら……」といているが、H男を受け入れることができない。仲間入りできないH男は、不満な気持ちを自分がここにいるという存在価値とみとめてほしい気持ちから「どカーん、どカーん」という擬声語を使ってあらわしている。そのようなH男の気持ちを感じた教師の配慮によって、お客さんになるきっかけができた。W男もH男もたがいにより自己を主張しているが、友だちや教師の働きかけにより、少しずつ相手を受け入れることができ、そのことにより、H男自身も主張をやらわけて仲間入りしている。ここで不満の気持ちを「どカーん」という擬声語で表現しているのが、大へん印象的で、その不満の強さや、それをぶ

ちまけたいという気持ちがよくうかがえる。

以上の実践事例から見られるように、幼児が入園して間もないころの遊びにおける友だちとのかかわりあいにおいては、遊具や素材などを通してかかわりあつていくために「ぼくが運んだげようか」というような物へのかかわりを中心とすることはかけにないよう思われる。

事例Iで見られるように、初めから友だちとのかかわろうとするのではなく、「・・・をさわってみたい」「・・・がつかいたい」という欲求をもち、その欲求をみたそうとする過程において友だちとのかかわりあいが生まれてくると考えられる。この事例のように「ぼくが運んだげようか」ということは仲間入りがしたくてまぜてほしいといっているかのごとく聞きとってしまうと、幼児のその時の状況にびったりしない指導になってしまう。ここでは教師は、このような幼児のことばから「・・・がさわりたい、使いたい」という気持ちを、満足させるように動いたことにより、さわってみたいという気持ちはみたされた。その結果「カレーうどんやです」というように自己についてははっきりと表現できたのではないかと思われる。「それならぼく運んだげよか」「カレーうどんやです」の話しことばは、それぞれ、その時の気持ちを

素直にいいあらわしているのであり、このように話せることが友だちとのつながりができていくためにも大切なことであると思う。したがって幼児のなげなく話していると思われる話しことばの一つ一つをよく聞きとり、何をいいあらわそうとしているかということを理解できるようにしなければならない。

友だちの遊んでいるのを見て、自分もその遊具を使って遊びたいと思ったとき「まぜて」という仲間入りのことばを使っている。事例Ⅱ(W男の場合とH男の場合)に見られるように仲間入りをしようとして「まぜて」といつてかかわっているが、相手の幼児には「まぜて」といつている幼児が自分と同じことをやりたがっていることを直観的に感じて何かの理由(「ほうちようがない」「男の子はあかん」など)をいつてことわっているが、「まぜて」という言葉の中に含まれている「……をして遊びたい」という気持ちを更に強くいいあらわすとき、相手もその強い気持ちを感しとり、「……やったら」「……なら」というように自分のやりたい気持ちを確認し、また自分と他人とがちがうのだということをはっきりさせて、相手のやることもきめようとしている。すなわちたんに、まぜてほしいことを「まぜて」ということばで話すだけでなく、その言葉の背後に積極的にやりたいという気持ちを強くもち、その気持ちを強くあらわそうと努力するとき、相手にもその心が伝わり、自分と他人のちがいが一層はつきりして、その時点でつながりが、成立するのではないかとも思われる。このように考えてくると、友だちと一緒に遊ぶ場合たんに仲間入りのことばとして「まぜて」といつたか?と「もう一度まぜて」といつてきたら」など「まぜて」ということばの使い方を指導するのではなく、なにをして遊びたいと思いつているかということをはかめねばならないと思う。

(注 20 ページ)

幼児の教育 第七十三巻 第六号

六月号 © 定価一七〇円

昭和四十九年五月二十五日印刷
昭和四十九日六月 一 日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

111 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

© 本誌御購読についての御注文は発売所
所 フレーベル館にお願いいたします

り、人に知られない不幸な問題を背負った子どもたちの世界の一端を知り、新たな視点でものを考える機会も得ました。

S子は種々の事情や、S子自身の生活基盤を築くために、交通戦争のこの都会地を離れ二年前石川県の田舎に越していきました。自然に囲まれた生活の中で今は幸福でしょうか。

S子とのめぐりあいによって学んだかずかずの教えは、私のめざす保育の心のあるものを変化させ、あるものを強固にしてくれました。

S子が遠くに行ってしまった今、よしなしごととは思いつながらもう少し心を配ってあげればよかったと胸の痛みを感じながら、レコードが流れるとキラキラと輝いたS子の黒い瞳を思い出しています。

(中央区立泰明幼稚園)

注 60ページ「幼児ののぞましい言語指導は、どのようにすればよいか」より、について

これは、大津幼稚園の研究報告集の一部を園側のご承諾を得て、転載させていただいた。この研究報告の内容は、三年間にわたるぼう大な実践記録にていねいな考察が附されたもので、資料集としても貴重である。これからも機会をみて、誌上で紹介していきたいと思っている。(編集部)

訂正

四月号 25ページ「子どもをもっている親と音楽」の著者徳丸吉彦氏の所屬が、「国立音楽大学」となっておりますが、「お茶の水女子大学」と訂正させていただきます。

なお本文中28ページ上段11行目「クラシック音楽だけが音楽だけだ」は「クラシックだけが音楽だ」の間違いです。おわびして訂正いたします。(赤間)